西南戦争（せいなんせんそう）　高熊山古戦場（たかくまやまこせんじょう）

県文化財保護審議会会長　原口　泉

１　はじめに

明治10（1877）年２月15日，西郷隆盛率いる私学校生徒を中心とした鹿児島士族約１万３千人は，政府に問い糾すことを掲げて陸路鹿児島を出発した。日本国内で最後の内戦となった「西南戦争」の勃発である。２月19日には鹿児島賊徒征討の詔勅が下り，西郷軍は賊軍となる。西郷軍は政府軍がこもる熊本城とその付近の田原坂を中心に激しい戦闘をくり広げるが，装備の質に劣る西郷軍は敗北し，熊本城攻略を諦めることとなる。以後，西郷軍は，熊本平野東部の大津から御船付近まで約20kmにわたり戦線を展開するが，城東開戦で敗北し，矢部を経て４月26日人吉に入り，人吉を拠点に薩摩・大隅・日向へ進軍することになる。

２　大口の戦いの概要

西郷軍は，明治10（1877）年４月下旬に本営を人吉に置き，峻険なる人吉の要害を堅守し，西は大口・水俣方面を，東は豊後方面に進出して，政府軍を牽制し，鹿児島にも部隊を派遣する作戦を実行に移していく。

これに伴い，辺見十郎太率いる雷撃隊と池辺吉十郎率いる熊本隊等計約1,000名は大口へ向かうこととなる。

５月初旬，政府軍（第３旅団）が水俣から山野（大口）へ進攻するが，５月10日雷撃隊・熊本隊の攻勢によって水俣近くまで押し返される。その後も，大口周辺では戦闘は続いたが，６月１日の人吉陥落により戦線が大口まで迫ることとなる。大口北西の水俣方面からは第３旅団が，大口北東の人吉方面からは別働第２旅団が大口へ向け進攻しており，６月７日に水俣の久木野，６月８日には大口の小川内，６月13日には大口の山野を占領した。対する西郷軍は大口に拠点を置き，高熊山には池辺吉十郎率いる熊本隊が，高熊山の東側にある坊主石山には辺見十郎太率いる雷撃隊が陣を構え，鳥神岡にも味方を配置し，堡塁（塹壕）を築いて，政府軍の攻撃に備えていた。山中では抜刀による戦いで対抗し，激しい戦いが繰り広げられた。しかし，６月

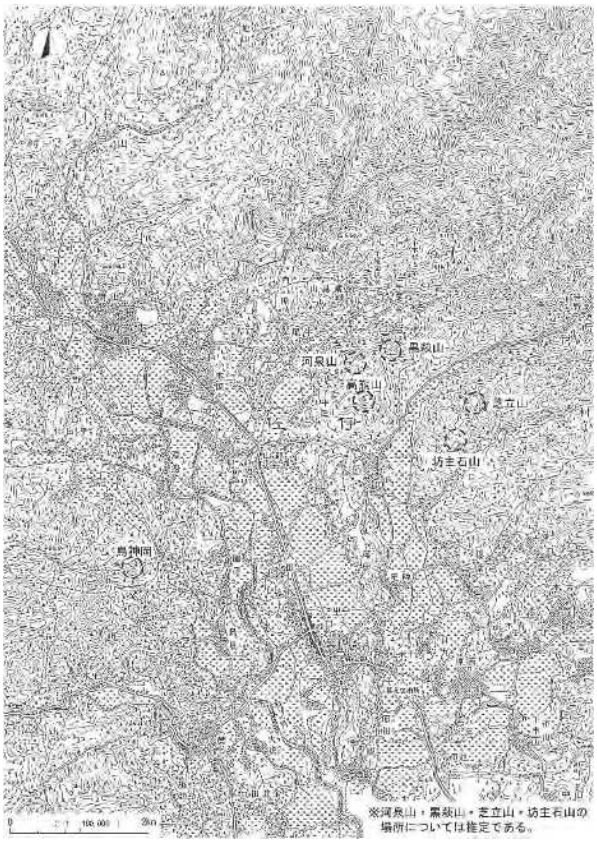

図１　高熊山古戦場周辺地形図（明治35年）

18日に坊主石山が陥落し，同20日，高熊山の熊本隊と雷撃隊本営の大口も総攻撃を受け陥落した。

３　高熊山古戦場の概要

(1)　戦闘状況（図２）

主に『別働第二旅団戦記巻之四』（安藤1887）や『戦袍日記』（高野1986）を参考に高熊山古戦場の戦闘状況を記述する。

６月18日

午前０時～２時頃　第３旅団が複数の中隊に分かれ高熊山を目指して山野を出発する。

午前３時30分頃，高熊山で開戦。第３旅団に対し，高熊山の西郷軍熊本隊が射撃と投石で対抗する。

午前７時頃　高熊山の西郷軍堡塁に迫るも，山が険しく死傷者が多くなり，第３旅団は退却する。

明け方　別働第２旅団髙嶋少佐，三好成行が第28中隊，第30中隊を率いて，高熊山を射撃する。三好成行は，第３旅団の苦戦を助けるため，西郷軍熊本隊を横から攻撃を行う。

午前10時頃　宮城彦八隊，第21中隊，第22中隊を率いて芝立山を出発する。西郷軍正義隊らの堡塁を破り，坊主石山を占領する。

西郷軍の雷撃隊と協同隊が坊主石山の奪還を図るため，臼砲２門で東南より激しく砲撃するが，失敗する。

６月19日

熊本隊は砲弾を避けるため，巨岩に隠れ，時々小銃で応戦する。夜，村民数十人を使って堡塁を修理し，砲弾を避けるための坑道を掘削する。

大雨に濡れたまま終日官軍の砲撃に悩まされたため，疲労困憊し，皆刀を抱いて眠る。

政府軍は，大砲12門で高熊山へ砲撃を行う。

６月20日

午前１時頃　第３旅団中隊が陣地を出発。

午前３時頃　大雨の中，第３旅団が暗闇を利用し，熊本隊の熟睡に乗じて高熊山に進撃

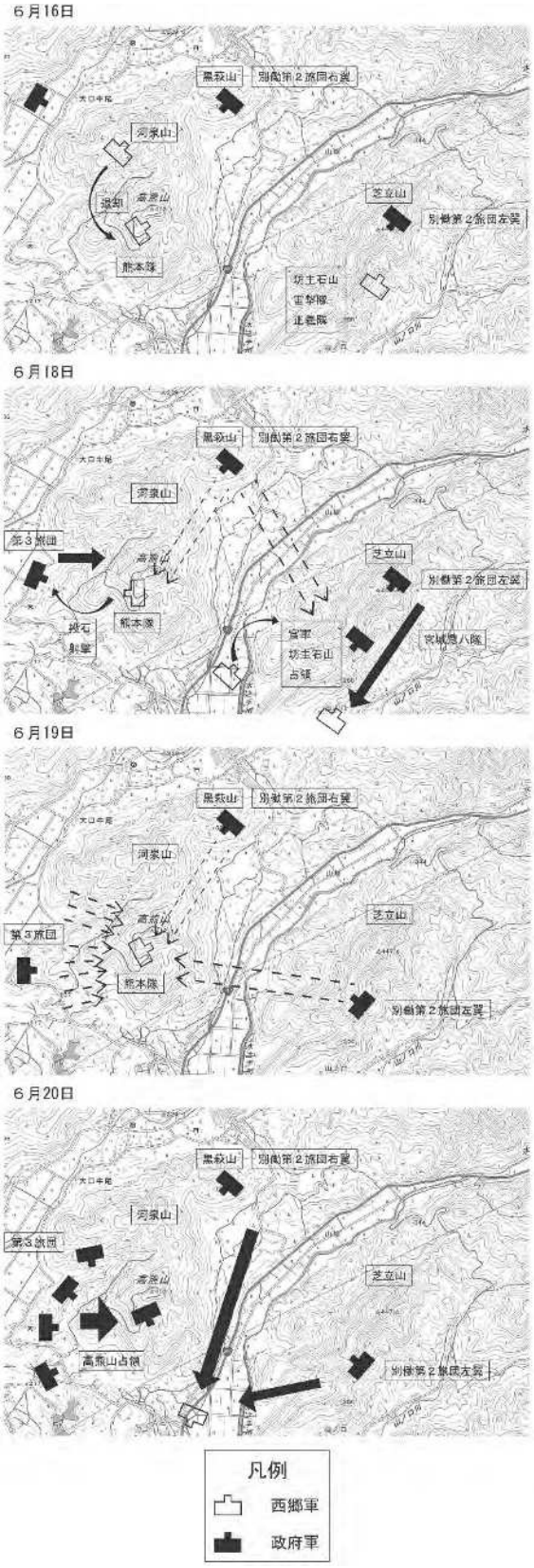

図２　高熊山の戦い戦況図

し，熊本隊の堡塁を次々に占領する。

午前５時頃　第３旅団が高熊山を占領。熊本隊は暗闇の中で第３旅団の不意の襲撃を受け，麓に向けて潰走。岩石の間を駆け下り，転落してけが人も出る。

午後４時半頃　第３旅団の一部は，菱刈馬越まで逃げる西郷軍を追撃し，戦闘が終了する。

熊本隊の戦死者13人，負傷者数十人に及ぶ。政府軍は，17日～20日で戦死者１名，負傷者23人で，この３日間に280発余りの砲弾を発射する。（西郷軍は政府軍により，高熊山に三方から700～800発の砲撃を受けた記載あり）

(2)　発掘調査成果の概要

令和元年度，「西南戦争を堀り，学ぶ」事業に伴って，高熊山山頂にある高熊山公園内に残存する９基の堡塁（図３）の精査と構造解明のためのトレンチ調査，周辺地形と配置の検討，銃弾などの遺物の発見を主な目的として，県立埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われている。

調査の結果，堡塁の規模や構造などが把握されたほか，堡塁１基あたりの守備人数や戦闘状況などについても検討がなされている。

堡塁２号～７号は，単体で構築されてはいるが，前後２段の１つの巨大な堡塁として機能したと推定される（全長約20m・幅約10m）。堡塁７号は，小隊長などの指揮者が陣取ったものと考えられる。

なお，当時の銃の全長が1.25mであるため，左右にある程度自由に動かすには，１人あたり，約2.5mが必要となる。この試算に基づけば，堡塁１基あたりの守備人数は，堡塁７号（全長10.80m）が５～６人，堡塁３～６号（全長４～６m）は，２～３人程度と考えられる。堡塁２号は，これら

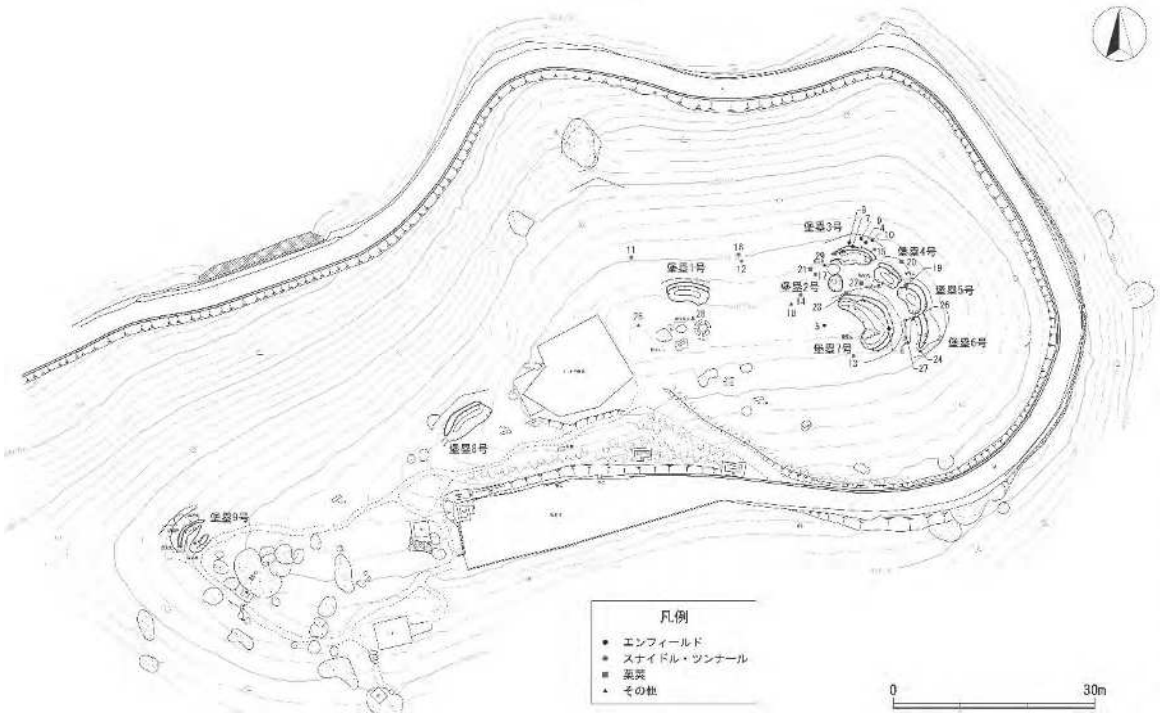

図３　高熊山山頂（高熊山公園）内堡塁配置図

の堡塁の端に位置しており，弾薬などの物資を置いた可能性がある。

高熊山山頂には熊本隊の２つの中隊（高野1986）と配置とある。熊本隊発足当初が15小隊（約1,300人）であったが，人吉で５中隊に編成され，１中隊100人となり，約200人が配置されたと推定される。この人数から西南戦争時は，さらに数多くの堡塁が構築されたと考えられる。

図４　高熊山古戦場出土銃弾

胸壁については，高さが計測値では低いが，実際は斜面に面しており，下から登ってくると高い壁が立ちはだかることとなる。また，堡塁８号・９号は，巨石を利用して高さを稼いでいる。胸壁には，多量の輝石安山岩が含まれており，強固なものとなっている。堡塁９号は，胸壁は巨石と輝石安山岩からなり，地形を利用した構造となっている。熊本市の調査では，胸壁に稲藁や墓石を利用したことを報告されているが，高熊山では，人工物の利用はなく，自然地形と地盤の輝石安山岩を利用して，胸壁を構築したことが分かる。

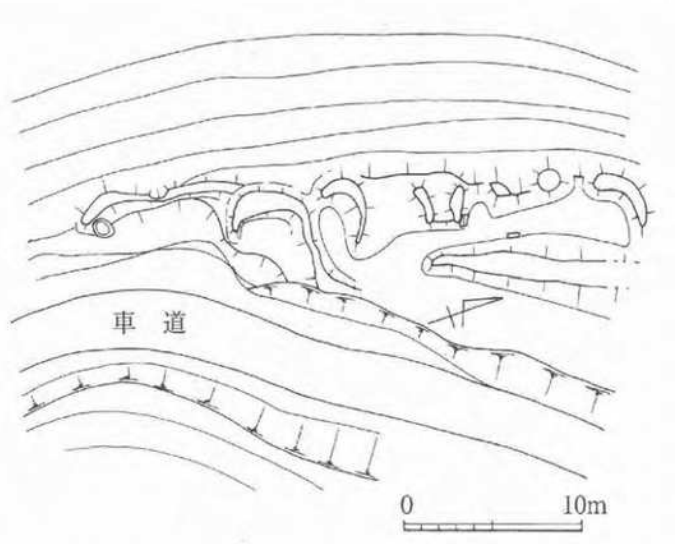

図５　高熊山中腹の堡塁

堡塁２号～７号の北東から東側では，銃弾（図４）が多く出土しており，この方面で激しい戦闘が行われたと考えられる。

胸壁から銃弾が出土している点，エンフィールド銃とスナイドル銃，両方の銃弾が混じっている出土している点，薬莢も出土している点から，かなりの至近距離での戦闘が想定される。

なお，高熊山の中腹にも堡塁が残存することが，報告されている（図５）（遠部・高橋2005）。

(3)　文献記録との比較

政府軍の戦闘報告書には，「午前一時整列直ニ出発高熊山下ニ至リ卒ニ令シ賊塁ニ達セスンバ発火ヲ禁ス準備已ニ終テ兵ヲ潜メ山頂ノ賊塁ヲ指シテ攀躋塁ヲ巨ル纔カニ五六米突時已ニ三時我全兵大声銃鎗ヲ揮テ突入賊狼狽或ハ放火スルモ弾着高ク或ハ降雨ノ為メ雷管鳴ヲ傳火ヲ得ス漸時ニシテ賊ノ三塁ヲ奪フ直ニ廠舎ニ火シ更ニ追テ又数塁ヲ陥ル是ニ於テ兵ヲ半月ニ布キ猛烈火撃夜ノ明ルヲ竢ツ天明ケ全山ヲ掠シ猶山下ノ残賊ヲ尾撃シ此夜馬越ノ右側ニ於テ守線ス」（C09084800200 戦闘報告表　防衛省防衛研究所），*下線部要約「午前３時、山頂の敵台場から５，６ｍに達し全兵大声を上げ銃剣で突入した。」*と記載があり，調査結果と合致する結果となっている。

なお，『戦袍日記』には，熊本隊が高熊山山頂に宿舎を建てた記録や，上記の「戦闘報告書」にも，それらを焼いた記載（二重線部分）があるが，今回の調査で，その痕跡は発見されていない。

４　高熊山古戦場周辺の陣

大口の戦いで陣が敷かれた場所のうち，高熊山以外で堡塁が確認されているのは，現在のところ坊主石山と鳥神岡である。

(1)　坊主石山

高熊山から東へ約１kmの所に，坊主石山がある。当時の記録では，芝立山に政府軍が，坊主石山に西郷軍雷撃隊が陣取る。現在芝立山という名称はなく，坊主石山となっている。

県立埋蔵文化財センターが，坊主石山を踏査した結果，５基の半円形堡塁が発見されている（図６）。すべての堡塁が西の高熊山を向いており，政府軍（別働第２旅団）の堡塁の可能性が高い。１基は整然と巨石を並べて，胸壁を構築している（図７左上）。また，山頂には巨石があり（図７右上），鉄鉾が奉納され（図７左下），その下には「明治13年庚辰２月吉日，奉願成就，願主野口八太郎」（所属不明）という石の水鉢（図７右下）が奉納されている。おそらく，西南戦争時に出兵する際に，鉄鉾を納め，無事生還したことに感謝したものと推察されている。

図６　坊主石山堡塁位置略図

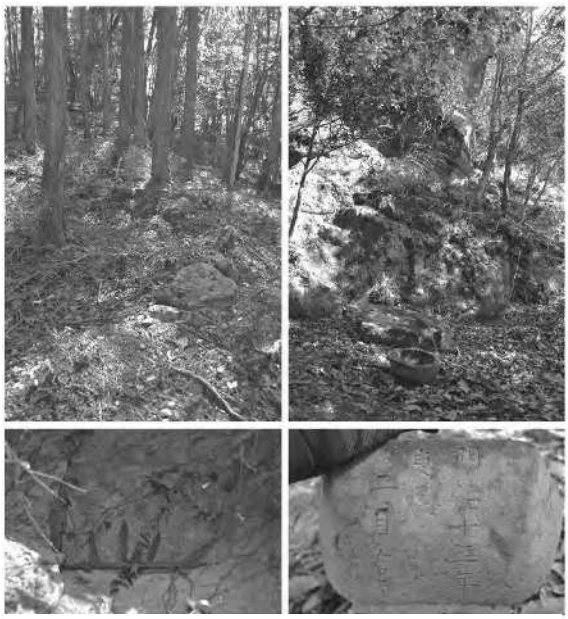

図７　坊主石山現況写真

(2)　鳥神岳

高熊山から南西へ約３kmの所に，鳥神岳がある。大口中心部に向かう途中の左右に立ち塞がるのが，高熊山と鳥神岳である。鳥神岳には西郷軍が陣を構えたと想定される。

なお，鳥神岳の西方に堡塁が１基あることが報告されている（図８）（遠部・高橋2005）。

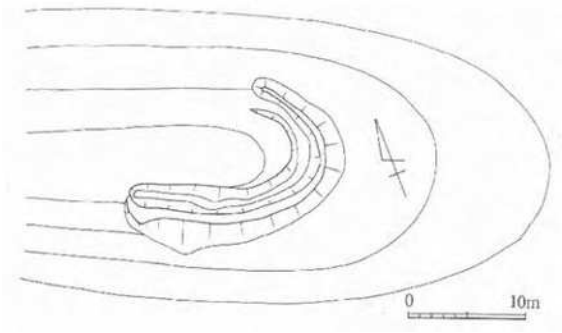

図８　鳥神岳西方の堡塁

４　遺跡の価値について

高熊山古戦場は，日本国内で最後の内戦となった「西南戦争」のうち，大口の戦いの際，西郷軍が構えた陣地の一つである。

高熊山公園内に残存する９基の堡塁は，残存状態が良いことに加え，発掘調査により，現存

している堡塁の構造や規模が明らかになった。また，銃弾や薬莢も出土しており，調査成果と文献史料に残る戦闘状況とがおおよそ一致している。以上のことから，高熊山古戦場は西郷軍が熊本を敗走した後の戦闘状況を伝えるうえで貴重な遺跡といえる。

なお，熊本隊の規模や文献等から，高熊山の各尾根にも堡塁が構築され，残存している可能性がある。また，高熊山東側の坊主石山にも辺見十郎太率いる雷撃隊が陣を構築し，高熊山西側方向，水俣との街道筋にあたる鳥神岡には，西郷軍が堡塁を構築している可能性が高い。「西南戦争」における大口での戦いの戦闘状況をより明らかにするため，将来的には，高熊山を中心とする大口一帯における，政府軍・西郷軍の陣地の全体像を調査することが望まれる。

参考文献

安藤定　1887　『別働第二旅団戦記巻之四』
大口市郷土誌編さん委員会 1981『大口市郷土誌上巻』
遠部慎・高橋信武 2005「高熊山へ」『西南戦争之記録 第３号』
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2021　『滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チャシケ迫堡塁跡群・岩川官軍墓地』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（191）
佐々友房 1891 『戦袍日記』
高野和人編著　1986『戦袍日記』
高橋信武　2017　『西南戦争の考古学』
原口泉　2018　『戦況図解西南戦争』
JACAR（アジア歴史資料センター），「戦闘報告表（防衛省防衛研究所）」Ref.C09084800200

図の出典

図１～４，６，７：鹿児島県立埋蔵文化財センター 2021　『滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・チャシケ迫堡塁跡群・岩川官軍墓地』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（191）
図５・８：遠部慎・高橋信武 2005「高熊山へ」『西南戦争之記録 第３号』

トマチン遺跡（いせき）

県文化財保護審議会委員　木下　尚子

はじめに－遺跡の立地とこれまでの調査

佐弁トマチン遺跡（大島郡伊仙町佐弁トマチン295）（以下，「トマチン遺跡」という。）は徳之島の南海岸のやや東よりに位置する先史時代の遺跡である（図１Ａ）。遺跡は，サンゴ礁の浅海[1]とこれに併行して続く砂丘上の一角にあり，東側の小河川に向かう傾斜地で区切られた標高約15m，長径約50mのやや独立的な砂丘の高まり上に立地する（図１Ｂ，図2）。

本遺跡は，平成４年（1992）に石棺墓と人骨が発見されたことから，「西ミヤド遺跡」として知られるようになった。発見時に鹿児島大学歯学部が調査を行っており，８体の埋葬骨[2]を確認している。発見時の調査報告は刊行されていないが，伊仙町教育委員会に残された所見では風習的抜歯[3]が確認されている。平成５年（1993），伊仙町は西ミヤド遺跡を町の史跡に指定している。

平成16年（2004）から同20年（2008），鹿児島大学の新里貴之助教（当時）を中心とする調査チームが科学研究費による本格的な発掘調査を実施して石棺墓２基と土坑墓１基を確認し，石棺墓１基について詳細な発掘調査を行ない，平成25年（2013）に報告書を刊行した。報告書では墓の構造，出土遺物，人骨，年代について専門的な分析と検討がなされており，これによって不明部分の多かった遺跡の内容が初めて明らかになった（新里編2013）。遺跡名はこの調査時に，土地の小字名により佐弁トマチン遺跡と改められた。

伊仙町教育委員会はトマチン遺跡の重要性に鑑み，平成28年（2016），平成30年（2018），令和元年（2019）に，遺跡の範囲を確認するために遺跡の発掘調査を実施した。一連の調査において，鹿児島大学調査区の東側斜面に設定した１トレンチと，同調査区の東北に接するように設定した２トレンチが調査され，新たに石棺墓２基と土坑墓１基が検出されている（図3）。「3か年の調査の結果，〔中略〕砂丘の頂部から斜面部にかけては珊瑚や石灰岩礫で構築された墓域が残存していることが明らかとなった。残存状況も良好であり，想定された範囲（鹿児島大学 2013）も東側に拡がることが判明した。次年度より報告書作成に向けた整理作業を進める。また，現在，佐弁トマチン遺跡周辺に同時期の遺跡が確認されていないため，今後も周辺沿岸部の砂丘踏査を継続する。」[4]

本報告は，以上の調査成果にもとづき，トマチン遺跡の鹿児島県指定にむけた所見をまとめるものである。なお，伊仙町による調査内容と成果については，現在報告書を作成途中であることから，令和３年（2021）11月８日～9日に県教育庁文化財課の横手浩二郎氏と木下が遺跡に赴き，発掘調査を担当した伊仙町教育委員会の榎本美里氏から説明をうけ，その内容に基づいてまとめている。

以下，説明の便宜のために，各年にわたる調査を以下のように呼ぶことにする。

- 発見時調査：1992年　鹿児島大学歯学部による
- 第1～5次調査：2004年～2009年　鹿児島大学による
- 第6～8次調査：2016年～2019年　伊仙町教育委員会による

1. トマチン遺跡の概要

①　層序

第1～5次調査において，表土から13層まで確認されている。12層以下はシルト層で，13層は亀

津層風化土，この下に基盤層である琉球石灰岩がある。11 層まではすべて砂層である。5 層から 12 層までは貝殻を含む層で，この地が墓地として使われる前には生活空間であったことを示している。5 層と 9 層はクロスナとよばれる褐色の砂層である。

② 墓

トマチン遺跡では，これまでの計 8 次の調査によって，石棺墓 4 基，土坑墓 2 基が確認されている（発見時調査で石棺墓 1 基，第 1～5 次調査では石棺墓 2 基と土坑墓 1 基，第 6～8 次調査で石棺墓 1 基と土坑墓 1 基）（図 3）。このうち発掘調査によって人骨が取り上げられた石棺墓は石棺墓 1（第 1～5 次調査）と土坑墓 2（第 6～8 次調査）である。

石棺墓 1 は，「4 層のある段階より構築された積石塚的な概観を備えた」墓で（新里編：p. 57），一次埋葬と再葬の人骨が 3 段のサンゴ礫の床にそれぞれ重ねられている（図 4）。人骨は，下段に 1 体（成人か），中段に 1 体（成人女性，頭骨が上段に再葬される），上段に 3 体（成人男性）検出された。このような構造の墓が検出されたのは，琉球列島では初めてのことである。第 1～5 次調査ではこのほかに，石棺墓 1 の東南に土坑墓 1（成人，大半の骨が失われる），同じく東側に石棺墓 2（成人か　未調査）が検出されている。なお，第 1～5 次調査で出土した被葬者に，風習的抜歯は認められていない（竹中 2013）。

以下，第 6～8 次調査で検出された石棺墓を仮に石棺墓 3 とし，土坑墓を同様に土坑墓 2 と呼んで記述を続けよう。土坑墓 2 は，石棺墓 3 の蓋石の上に人骨の一部がのる状況で検出された。土坑墓 2 はクロスナ層の上位の砂層で検出される一方で，石棺墓 3 ではクロスナ層に側石を埋め込んだ状況であった。この出土状況は，石棺墓 3 が石棺墓 1 より古い時期の構築であった可能性を考えさせる。ただ，土坑墓 2 の人骨の両側の大腿骨が鋭いもので截断された状況であるとする人類学者の指摘があり[5]，発掘調査担当者は，石棺墓 3 が土坑墓 2 の人骨を截断して土坑墓 2 より新しい時期に構築された可能性もあるとしている。

③ 墓の時期

第 1～5 次調査の 3 層・4 層で出土する土器は，奄美・沖縄に多い仲原式（なかばるしき）土器で，これが墓の時期に対応する。出土した仲原式土器は，型式的検討により，縄文時代晩期末から弥生時代前期に位置付けられている。ことに底を意図的に穿孔した小型の深鉢土器の存在は，埋葬時の供献行為を示唆する。なお，埋葬遺構の下の貝層からは喜念Ⅰ式土器，宇宿上層式土器が出土し，縄文晩期前半の堆積であることを示している。

第 1～5 次調査の石棺墓 1，石棺墓 2，土坑墓 1 と，1992 年に発見された人骨については，それぞれに炭素 14 年代が出されており，いずれも 2400 年前から 2000 年前の範囲にある（図 5）（A）。石棺墓 1 の 3 層にわたる 5 体の埋葬も，「較正年代ではおおむね 2400calBP から 2000calBP の年代を示しており」（米田ほか　2013：p. 173），相互に年代の重なる部分が多いことから「極めて短時間に行なわれた埋葬」であったとされる（新里編 2013：p. 265）。

第 6～8 次調査による石棺墓 3 の人骨の測定年代は，以下のとおりである[6]：

2σ：2749～2729calBP　　1σ：2754～2719calBP（B）

また，発見時調査時に出土した土器（小型甕）の付着炭化物の年代は以下のようであった：

2σ：898～804calBC　　1σ：846～807calBC（C）

最後に示した人骨と土器の年代（B と C）は最初の人骨の年代（A）に比べて数百年古い点が注意されるが，これらの数値年代が事実を正しく反映しているとすれば，墓の時期は弥生早期から中期前葉の範囲ということになる。

④　出土遺物

埋葬に伴う遺物には，土器（図 6-1,2）のほかに貝製品が多い。この中で多数を占めるのは小型イモガイの螺塔を使った玉類である（同-3,4)。カサガイ類に粗孔を穿った製品（同-5,6）は，この時期の埋葬によく添えられる呪具の一種とみられる（木下 1996)。石棺墓 1 の上層で出土したゴホウラの背面貝輪（同-7）は，本来身につけられていたものであろう。石棺墓 1 の上層人骨と，1992 年出土の石棺墓の人骨にそれぞれヒスイ玉が 1 点ずつ伴っていたことは，九州以北との関係を示しており注目される（同-8,9)。

⑤　墓域表示

トマチン遺跡では，墓の上とまわりの旧地表面が一面の礫に覆われていた。報告書によると，礫はおもに緑色岩類と石灰岩類（42%と 56%）で，第 1～5 次調査では総量 1 トンに達したと報告されている。緑色岩類は，遺跡から北に 2.8km の本川河口の海岸で採取されたと考えられ，遺跡への運搬にはかなりの労力が投下されたと推測される。石灰岩類は近辺の海岸で採取が可能である。覆石は第 1～5 次調査域をほぼ覆う範囲であり，こうした石灰岩類と緑色岩類で覆われた墓の周囲は，緑色と白色の際立つ空間であったと推測される。いっぽう，第 6～8 次調査で検出された土坑墓 2 と石棺墓 3 の周囲に緑色岩類はほとんどなく，白い石灰岩の礫が主体をなす状況であったとされる。こうした状況の墓は琉球列島にこれまで知られておらず,極めて特徴的な習俗ということができる。

2. 遺跡の保存状況と遺跡の範囲

これまでに発掘調査された墓をみる限り，トマチン遺跡は全体としてよく保存されているとみられる。なお，以下について今後の検討を期待する。

砂丘頂部で検出された石棺墓 1，土坑墓 1 は後世の攪乱等を受けてはいないようであるが，東側斜面にある土坑墓 2, 石棺墓 3 については, クロスナ層より上層について攪乱の痕跡が認められる。同じく東斜面で 1992 年に発見された石棺墓についても，石棺自体の状況は不明であるが,「人骨の大部分は大きく攪乱された状態で出土し」,「破損の程度も大きい」とされる[(7)]。これらの状況に関して気になるのが，第 6～8 次調査において斜面に沿った方向の層位図（図 7）で，クロスナ層の上に堆積する包含層が大きく削られた状況が示されている点である。セクション図は，河川に向かった傾斜面がいずれかの時期に人為あるいは自然の災害等によって大きく削られた可能性を示している。第 6～8 次調査で検出された土坑墓 2 と石棺墓 3 の人骨の，谷側（東側）にのびた 2 体の大腿骨が，いずれも両脚ともに截断されている状況は，こうした大規模な土の移動に係わっているのかもしれない。この点は遺跡の理解にも影響するので, 状況が許すのであれば, 砂丘東側斜面について，堆積学的な追加の調査を実施することが望まれる。

本遺跡は，6 層以下の貝層について未調査であり，これをも含めた遺跡全体の価値付けも，将来的には検討する必要があるだろう。

現段階で遺跡の範囲を想定するのは容易ではないが，時間や経費面での選択肢が限られている状況では，遺構が確認された砂丘の高まりを中心に，地形的なまとまりと地籍の境界を参考に範囲を考え，今後の分布調査等で東側の状況を確認するのが妥当ではないだろうか。

3. まとめ

・　トマチン遺跡は縄文晩期から弥生中期にかけて存在した海岸砂丘上の遺跡で，縄文晩期には生活跡として，縄文晩期末以降は墓地として機能した。発掘調査は墓を対象として実施されてい

る。

- 発掘調査では石棺墓 4 基，土坑墓 2 基を確認しており，このうち石棺墓 1 は積み石により構築された上下三層をなす特異なもので，隣接する土坑墓も覆石をもつなど特徴がある。さらに複数の墓のまとまりを礫で覆うことにより墓域を示しているとみられること，このまとまりが複数存在することなど，墓地の構造を示す点でも特徴的である。このほか，九州以北の地との関係を示すヒスイが出土しており，時期の明らかな資料として琉球列島では貴重である。本遺跡は奄美群島の先史時代の墓制と文化交流の実態を理解する上で，不可欠な遺跡ということができる。
- 墓にはクロスナ層（5 層対応）に掘り込まれているものと，その上の砂層中に構築されたものがあり，墓間に時間の先後が存在した可能性がある。いっぽう，墓内の人骨，供献土器の炭素 14 年代では弥生時代早期から中期前葉の時間幅が認められる。したがってこれらの墓は一定の時間幅において連続的に存在していた可能性があり，今後の検討によってその具体的な関係を解明することが期待される。
- トマチン遺跡の墓は全体としてよく保存されているが，東側斜面の堆積には大きな削平の痕跡があり，今後，この削平と遺跡との関係の確認が期待される。
- 現段階で遺跡の範囲を想定するのは容易ではないが，遺構が確認された砂丘の高まりを中心に，地形的なまとまりと地籍の境界を参考に範囲を考え，今後の分布調査等で東側の状況を確認するのが妥当ではないだろうか。 (2021. 12. 5.)

本報告をまとめるにあたり，新里貴之准教授（沖縄国際大学）に種々教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

註

(1) 幅 500m から 800m の連続性のよい裾礁。

(2) 調査を行った小片丘彦氏と峰和治氏によると，人骨は「大きく攪乱された状態」で出土し，「個体識別が難し」かったが，「少なくとも成人 5 個体，未成人 2 個体」があり，このほかに「1 体だけ原埋葬位をとどめたまま出土した例があった」とされる（新里編 2013：p. 33）。

(3) 下顎の左右中切歯の歯槽が閉鎖しているもの。

(4) 伊仙町教育委員会資料（2020）による。

(5) 人骨の取り上げを担当した竹中正巳鹿児島女子短期大学教授による所見。

(6) 伊仙町教育委員会資料。パリノ・サーベイ社による分析結果。ただしこれには海産物寄与率を考慮した海洋リザーバー効果の補正が行われていないので，古く出過ぎている可能性がある。

(7) 小片丘彦氏と峰和治氏の所見（新里編 2013：p. 33）。

文献

木下尚子 1996「貝と埋葬習俗」『南島貝文化の研究』，pp. 449～478，法政大学出版局

新里貴之編 2013『徳之島 トマチン遺跡の研究』，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

竹中正巳 2013「トマチン遺跡出土の人骨」『徳之島 トマチン遺跡の研究』，pp. 149～162，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

米田穣・松崎浩之・小林紘一・伊藤茂・廣田正史 2018「トマチン遺跡出土人骨の同位体分析と放射性炭素年代測定」『徳之島 トマチン遺跡の研究』，pp. 169～173，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

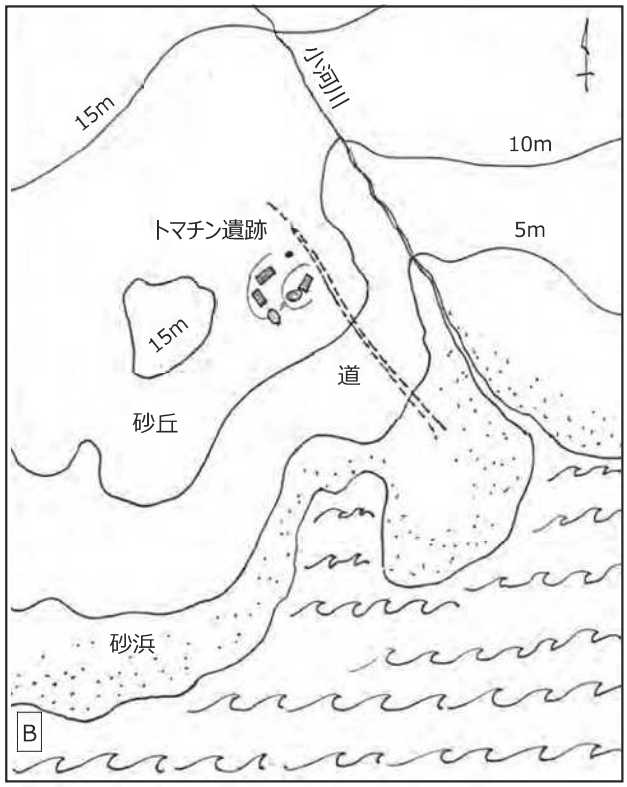

写真１　遺跡近景

図１　トマチン遺跡の位置（Ａ　トマチン遺跡の位置（右図）　Ｂ　トマチン遺跡周辺の地形（左図））

図２　トマチン遺跡の立地（黒丸の位置）

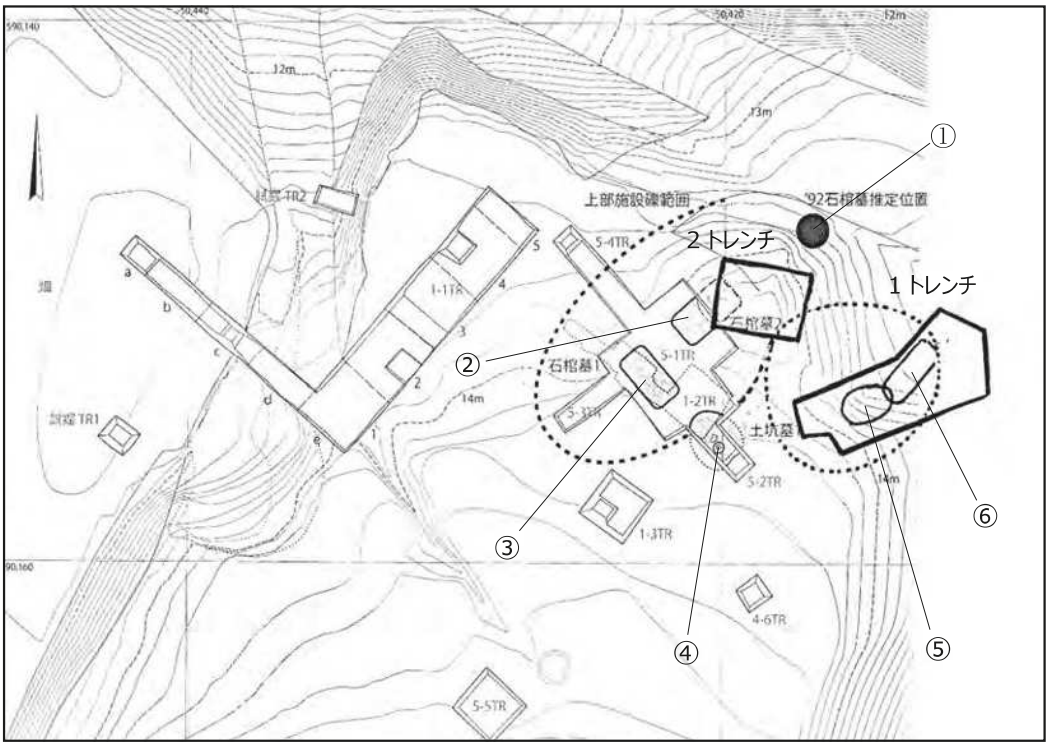

図３　トマチン遺跡調査区と遺構（新里編 2013：図 51、伊仙町提供資料をもとに作成）

①1992 年発見石棺　②石棺墓２　③石棺墓１　④土坑墓１　⑤土坑墓２　⑥石棺墓３

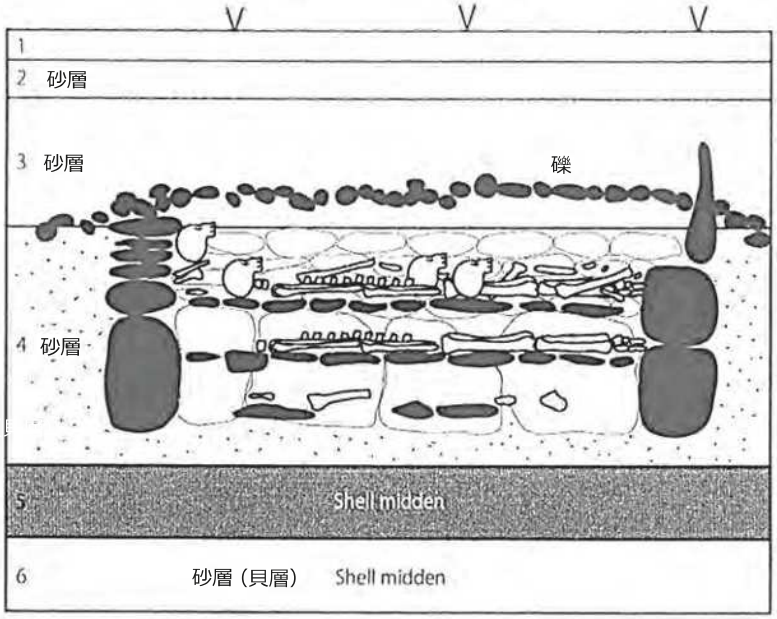

図４　石棺墓１と層序（新里編 2013：p. 285 引用、一部加筆）

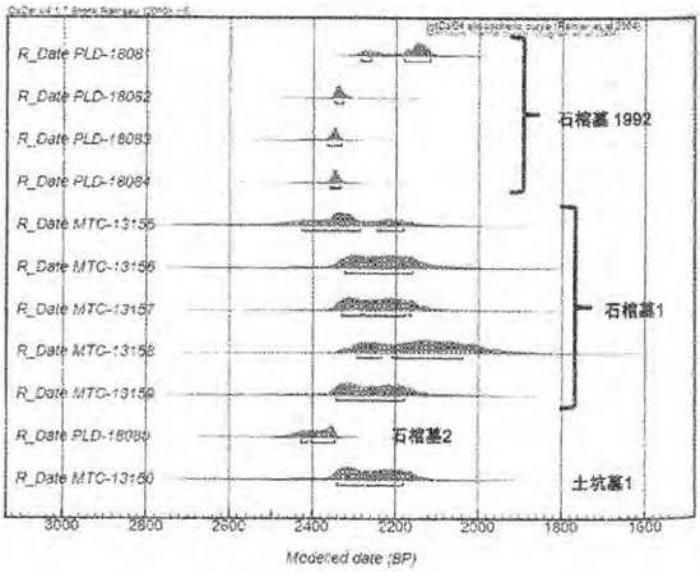

図５　トマチン遺跡出土人骨における較正年代
（海産物寄与率 50%で海洋リザーバー効果を補正）
（新里編 2013：p. 172　図 127 引用）

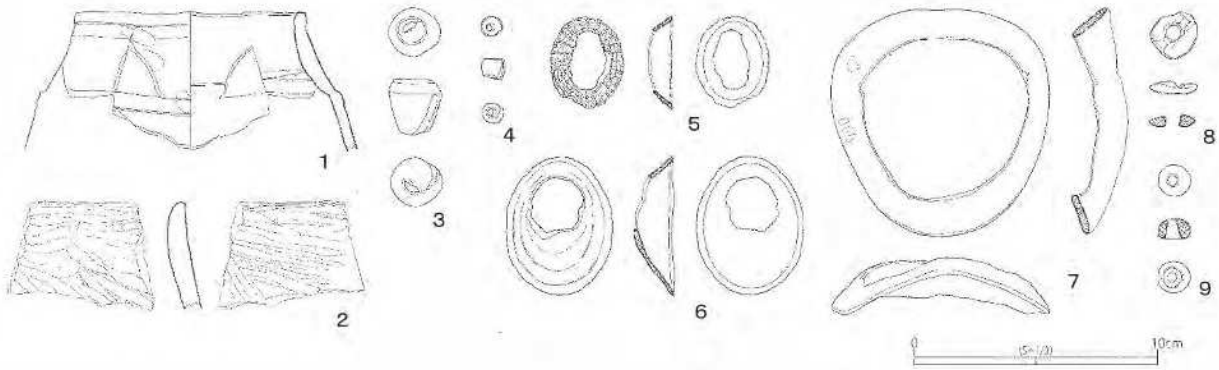

図６　鹿大調査時の出土遺物（すべて新里編 2013 から抜粋転載）

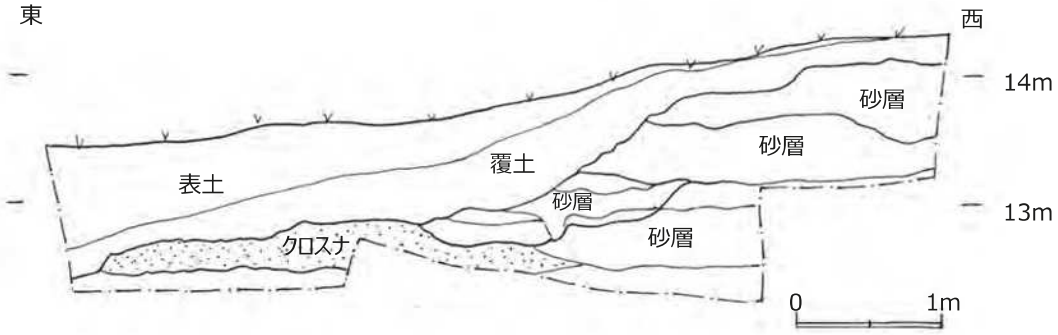

図７　トマチン遺跡１トレンチ　南側壁土層断面図
（伊仙町教育委員会提供による１トレンチD−D’セクション図と榎本氏の教示により作成）

写真２
土坑墓２

写真３
石棺墓３

写真４
石棺墓３残存部断面
（右側石近くに骨片）